

自由16

観光客によるヤクシマザルに対する餌やりの実態調査

田中俊明（東京大・総合文化）

野生ニホンザルに対する餌やりが、全国的に問題になっている。鹿児島県の屋久島も例外ではなく、安房林道・西部林道周辺に出没する一部のサルが餌付いてきたことが報告されている。本調査では、安房林道で最も餌付けが進行していると考えられる一群（通称アオメ群）を追跡し、林道通行車の何割が餌を与えているのか、また、餌を与えた人の属性・態度などを調べた。なお、アオメ群の個体のうち最低5頭は自ら車に乗ってエサねだりをするのを確認しているが、しばしば車を動かしても降りないでそのまま乗っていつてしまうことがある。今回は、降りずに乗っていつてしまった場合、その車両をバイクで追跡し、その後エサを与えるかどうかについても確認した。

【結果】全通行車両の約3.6%（34/942台）で餌やりが記録された。記録された34例中15例はバイク追跡の結果確認されたものだった。このことから、全体としては、それほど積極的な餌やりは行われていないと考えられる。しかし、車に乗って執拗にエサをねだる個体に対しては、車から降ろすために仕方なしにエサをあげてしまう人が少なからずいた（バイクで追跡した車両の約30%）。なお、餌を与えた人の属性としては、レンタカーで来ている家族連れが最も多かった。

自由17

前頭連合野と側頭葉内側部における物体および空間位置に関する記憶機能の分布
佐藤暢哉（広島大・生物圏・環境計画）

本年度は、側頭葉内側部前部領域（嗅周皮質およびその周辺領域）のニューロンの視覚刺激に対する応答特性を調べ、これまで記録した側頭葉内側部後部領域（海馬傍回とその周辺領域）と比較した。

課題遂行中の二頭のアカゲザルの嗅周皮質から、142個のニューロン活動を記録した。課題はモニタ画面に呈示されたスポットを注視し、その形が変わるまでレバーを押し続けたままでいるというものであった。サルがスポットを注視しているときに顔などの画像やスリットといった視覚刺激を呈示した。記録した嗅周皮質ニューロンのうちの39.4%である56個のニューロンが視覚刺激に応答した。

12個の嗅周皮質ニューロンおよび31個の海馬傍回ニューロンについて、視覚刺激をモニタ画面上のさまざまな位置に呈示し、そのニューロンが最も強く応答する場所について調べた。その結果、嗅周皮質では調べた12個のうち、10個（83%）のニューロンで視野中心から視角10度以内の位置にもっとも強く応答する刺激位置があったのに対し、海馬傍回では調べた31個のうち、16個（52%）のニューロンで視野中心から視角10度以上離れた位置に呈示された刺激にもっとも強く応答した。このような周辺視野の刺激の呈示位置をより好むニューロンの割合は、両部位の間で統計的にも有意な差が認められ（ $p < 0.05$ ）、嗅周皮質では主に中心視野からの情報を処理しているのに対し、海馬傍回では中心視野だけではなく、周辺視野からの視覚情報も処理していることが示唆された。